IRREGULAR

６１６

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＲＲＥＧＵＬＡＲ

【Ｎコード】
Ｎ２６８５Ｓ

【作者名】
６１６

【あらすじ】
ラスボスはヤンデレストーカー系神様（自称）。友情！青春！家族愛！巡る策略、裏切り、戦いの歴史に、権力と禁断の恋、血で血を洗う愛憎劇…？
物語の世界を舞台に、面倒臭がりの魔女と、薄幸のリーダーと、バのつくバスケ少年の異世界ストーリー。
※※※※　『私は信じたいものを信じるわ』魔法の使えない魔女エリカ。幼い彼女は、まだ見ぬ父の影を目で追いながら、『物語管理局』なる組織に『保護』される。そのころ管理局のある『本の世

界』では、殺人鬼アン・エイビーが行動を開始。死傷者３００名以上の被害を出す。【本の国】編、近日開始。

一作目：鳥頭の発見

アスカという人間は、しがない院生であった。
大学で研究に明け暮れる日々。『それ』が出来たのは、まさに偶然としか言いようがない。

『異なる世界を目視する装置』。

発毛剤を作ろうとしたら不老不死の妙薬になっただとか、バナナを温めようとしたら電子レンジがタイムマシーンになってただとか、そういった類の偶然だった。不可思議なる『現象』、『奇跡』と言ったほうがいい。
そしてアスカはあれよあれよと時のひと。
もともと、異世界の存在は証明・認知されていた。小さな偶然の発見は人類の夢と、さらなる技術を呼びこんで飛翔する。
たった四十年。アスカが還暦を迎えるころ、『異世界へ行く技術』が実現した。
さて、人類さらなる高みへいざゆかん。

１１３歳。晩年のアスカは自伝でこう語る。
『私はとんでもないことを仕出かしたのだと、涙を流して神様に頭

を下げました』

人々は言った。これまでの人類の発展は、このためにあったのだと。

異世界旅行はかつての天空にある月の地のごとく、世界の夢と希望の象徴（シンボル）として掲げられる。

異世界から持ち帰ったアイテムで、その世界は急速に発展した。大人は寝ていても一日の用事を終わらせることができて、子供は健康に、よく生まれるようになった。

そしてついに、西暦２０００年歴の終わりも間近。異世界探査員が見つけたアイテム。

それは・・・・・・。

※※※※

「かの高名なるアスカ教授の自伝〈軌跡〉の一文が、物議を醸しています」

『私はとんでもないことを仕出かしたのだと、涙を流して神様に頭を下げました。私が偶然に愛されたしがない院生でいれば・・・いいえ、ただの親のすねかじりの馬鹿だったなら、この世界がここまで変わることなど無かったのです。（中略）

私はあまりに苦々しい気持ちでいっぱいでせ。愛しい私の世界の皆様、感謝と、そして言葉しか捧げられない私を許してください。ごめんなさい』

西暦２０００年歴の終わりも間近。異世界探査員が見つけたアイテム。
それはまさに、世界のリセットボタンだった。

異世界では、羽も生えそろわない子供がくわえているような玩具だったという。
探査員は息子に夢の詰まった玩具を与えるつもりで、その小さな手の平に収まる物体を持ち帰った。
世界に急速に広がる波紋。母なる星を包むその波は、破滅そのものだった。
世界が緩やかに死んでいく最後の時…世界中に、延命装置で縁取られたアスカの言葉がこだまする。

『ごめんなさい』『ごめんなさい…』『ごめんなさい……』

アスカ老人はベットの上でほろほろとクチバシを伝って涙を流し、羽根の禿げた頭を下げた。来るべき時に腕の産毛が逆立ち、ぞわぞわと身を震わせる。
途方もない後悔。人生１１５歳、世紀の大発見をして９１年の長き時を見届けていたアスカは、発展していく世の中に言い知れぬ恐怖を感じていた。
溜まりに溜まった者が、ああついに……弾けてしまったのだと。
飛鳥（アスカ）がその小さなきっかけを見逃すほどの頭だったなら。知識も何もないただの若者だったなら…。

この世界で『人間』と呼ばれる鳥たちは、その声を誰に聞かれるでもなく厳（おごそ）かに消滅した。
小さな偶然を発見してしまった飛鳥も、兵器を子供のおもちゃをして持ち帰った探索員も、ああこれ全てがホントの鳥頭。

――――合掌――――

さて異世界は数多あるわけで、けれど『自由に世界を渡り歩く』なんて技術はどの世界の文明でも（たぶん）まだ生まれていなくって、そんなさまざまな異世界を渡り歩く若者が一人だけ世界の最期の時に立ち会った。

若者はさまざまな世界を見てきた。そして驚愕する。これほどまでに文明の発達した世界は初めてだ、と。

もともと自分のように異世界を渡り歩く『体質』があるわけでもない。ただの一般人が、さまざまな世界へ行って帰ってくる。これはすごいことだ！

けれどその世界は滅んでしまう。なんてもったいないこと。若者は『異世界へ行く技術』を持ち出し、自分のものにした。

仲間を集めて徒党を組んで異世界へ送り出す。さまざまな世界があるのだ、石ころが宝石になる世界だって探せばすぐに見つかる。ゴミでも死体でも場所を変えれば宝と同じ。

若者は財を得た。

ゴミでも死体でも場所を変えれば宝と同じ。人間だってそうである。あの世界で『ニンゲン』として生きていた鳥たちももちろんのこと。

若者は中年となり、ただの男になっていた。老いていく体に危機感を覚えだしたころ、ついに見つける。

『不老不死』！！

それは小さな世界の片隅で、ひっそり生きている民族の血肉。どんな力でも増幅剤となる妙薬。力と言っても様々ある。筋力、視力、思考力、精力、生命力ＥＴＣ。ああありがたや、と彼は……。

ゴミでも死体でも人間でも、場所を変えれば宝と同じ。その一族の『増幅剤』となる能力はどこでも高く売れた。

彼らは『異世界管理局』と名乗り、文字通り『世界』を『管理』しだしたのである。

いつしか男は非道と言われ、そして男に立ち向かわんとする集団が出来て――――――。

男を討ち取った集団は、新たなる『異世界管理局』という組織になった。『異世界を管理』するのではない。『異世界を犯すものを管理』するのだ。

世界にはその世界の住人達がつむぐ『筋書き』が存在する。『筋書き』というあるべき歴史は犯してはならない。その一線は越えてはならなかったのだと彼らは誓う。

ああ、けれど男たちが縦横無尽に荒らした世界に後遺症が残ってしまった。どの世界の『筋書き』にも属さない、あの男のようにあらゆる世界にも馴染めない人々。生まれながらに『筋書き』を歪めてしまう人々。

異世界管理局は彼らに名前を付けた。『異端者（イレギュラー）』。筋書きに無い存在（もの）。

異端者（イレギュラー）を集めたもう一つの組織が出来上がる。筋書きを守る組織、『物語管理局』というものである。

さてこれは、そんな異端者（イレギュラー）達のお話です。

※※※

さて、この世はかくもおかしい“物語”によって綴(つづ)られている。

世界にはたくさんの物語が存在する。それは実在の人物の人生をなぞった、本当にあった物語の場合もあるし、人の頭の中で出来た、空想が転じた作り話ということもある。

しかしすべてに通じるのは、それが人間という生き物が、人間にしか持っていない力を持って作った“物語”という一つの法則だということだ。

逆に言えば、先の物語にあった鳥人間たちの様に、それを行える者こそが真に人間という生き物のくくりに入るのである。

考える頭のある君たちは、思ったことがなかろうか。

物語が持つ一つの力。そこには――――――たとえば、その読み終わった紙面の上にはほしいものがある、何かを得たと。

知識、疑似的(ぎじてき)な経験、そして何より希望も、いうなれば夢というものを得たことは――――――？

この世は、かくもおかしき“法則”によって綴(つづ)られている。もしもの話だが、僕にとっては真実だ。

この世界がもし、誰かが考えた“物語”の中だったとしたら――――君という人間が、もしその物語の登場人物であったとしたら――――君の人生が、知らない誰かの手によって考えられたもので、物語として読まれているとしたら――――――？

悲観してはいけない。これは例えば、先に言った、物語世界に必ず存在する夢や希望というものが、君たちの世界にも必ず存在しているということなのだ。
そして、その物語を綴った“誰か”もまた、別の“誰か”にかがれた物語の中の人間なのだ。
みんな同じ。日本で生活しているだろう君は、この言葉に多大な安心感を得るはずだ。

こう考えるといい。君に起きた不平等や不条理や理不尽も、すべては“誰か”が考えたものなのだと。それは神様などではない。君と同じ、ただの人間。
人類みな兄弟などとは言いはしないが、いるかもしれない神様よりかは、よっぽど信じられるとは思わないだろうか。

そして、この世はかくもおかしき“物語”によって綴られている。
しかしながら、最近はいるのだ。誰の物語も描かれなかった、いるはずのない存在というのが――――――――――――。

二作目：夢見るネズミと、大好きな聖女様。

カンカンカンカンカンカンカンカン……

警報　警報

海沿いの街。神社の手前にある踏切。しましまの遮断機が目の前を降りていく。赤いライトが、チカ、チカ、チカ、チカ、チカ……

「私は、貴方のために死んでやるのよ」

彼女はそう嘯(うそぶ)いた。

「これまでも、これからも、今回も。貴方のために私はいつだって命を落とすの。ねぇ、わかる？貴方のせいで死ぬんじゃないの。私が、私の意思で、貴方のために死ぬのよ」

首の後ろから、全身がどっと冷たくなった。

「あなたがわたしにそうさせるの」

アスファルトに横たわる女はしっかりとした口ぶりで、悪いことをした子供を叱(しか)るように微笑みすら浮かべて見せた。

けれど転がる出刃包丁が、脂と血で生々しく濡れそばって光る欠けた刃が、すべて知っている。

――――――けれど、彼女を刺したのは僕だ。

「貴方のために私は死ぬのよ？愛する夫を置いていくのも、ここにいる…かわいいこの子を道ずれにしないといけないのも、全部。ぜんぶ、貴方のため…」
女は膨らんだ腹を撫でる。あくまでも愛おしげに、見せつけるように。

男は長い時を生きてきた。彼女と生きるためだけに、その生を永(なが)らえてきた。不老不死のその体はまさに神の所業である。けれど、だからといって何をするでもない。ひっそりと、隠れるように永遠の時を消費するしかない。
彼の生きる意味は彼女だった。輪廻に組み込まれた彼女を守るためだけに彼は生き、彼女が生まれるたびに彼女に寄り添い、いつだって短命で終わる彼女の世話をしてきたのだ。
彼は何百年も、何千年も何万年も、体で彼女に尽くす。彼女は心で尽くすことで彼にこたえてきた。

――――――――僕の一番は彼女で、彼女の一番は僕。彼女は不幸と病に愛されている。ああ、だから僕が守ってあげないと…

そんな彼女が、どの生でもどんなに尽くしても病床しか上がれなかった彼女が、今度は健康な体であまつさえ――――――――知らぬ男の子を宿している。
しかし彼女はまた死んでいくのだ。
彼女曰く。「自分のせいで」

彼女は小さく苦しげにうめき、大きな腹が窮屈そうに体を丸めた。

「…許さないわ」

彼女がささやく。

「許さないわ、絶対に。今度は私の命だけじゃない、この子たちまで貴方は奪う。…許してやるもんか、忘れるなよ。…覚えてろ」

にまぁ、と彼女は僕に笑いかけた。

「私は貴方のせいで死んだのよ。貴方が私にそうさせてきたの。貴方が私にさせてきたのは生きることじゃない。貴方のために死ぬことだけ。何度生きても、もう私は貴方を許さない。許せないわ。これから先、この子たちが生きるはずだった時がたつほどに貴方の罪は増えていくのよ。だから私は、もう一度だけ貴方のために死んで最後にする……」

真っ赤な彼女の瞳が濁る。

「ふふ…ころしてやる、うらんでやる、のろってやる、つぶしてやる、じごくにおちろ…」

数ある恨み言をもにゃもにゃと呟いて、彼女はうごかなくなった。

何度も見た彼女の死。――――――――彼女はまた生まれ変わる。

でももう、僕を愛してはくれない。

カンカンカンカンカンカンカンカンカン……

警報　警報

今更ながら踏切の警戒音が頭に届く。電車が切る風が、彼女の黒髪をさらっていく。

通り過ぎる窓の中の誰かさんが彼女を指さして、ガラス越しに無音の何事かを叫んでいた。

僕は今までで一番重い彼女を抱きかかえ、ゆっくりと世界の外へと歩き出した。

君の思い通りになったよ、根子(ねこ)。根積(ねずみ)は…僕は、君を忘れられなくなった。幸せだった今までと同じように、かわいそうな君の最期を鮮明に思い出す。

ねぇ、根子。僕はこんな最後は駄目だと思うんだ。君は僕を裏切ったけれど、それは忘れてあげるから。

そうだ、ねぇ、根子。

ねぇ

三作目：魔法使いの国　魔法使い杖専門店『銀蛇』

私たちのいう処の『英国』に似た風情の、魔法使いの国。彼女はその中心都市の一番の商店街に店舗を構えている、ボロの（しかし老舗の）杖職人に生まれた。容姿も人並み以上、活発にして利発、人生を最初から最後までそれなりに愛され生きてきた。

しかし彼女に難あるというなれば、その中身に他ならない。

私は彼女を【利発】と称したが、それは頭の一部を除いて、のことである。

もし貴方が彼女に逢い会話したなら、きっとニコニコと人当たりのいい作り笑いを浮かべていることだろう。

話しているうちに、拗ねたような、少し怒ったような、そんなむっつりとした無表情になれば少し仲良くなった証拠。

終いにボーッと、あらぬ場所を見つめている姿を貴方にみせれば、それは彼女が貴方に心を許したということである。

真実（かのじょ）を知っている人は言う。【彼女は変人だ】。

しかし不可思議なることに、秀逸な職人芸で本性を塗り固める彼女と直に接した人はいつだって、よほど捻くれていない限りは高評価を付けられる。

【容姿が良くて、文武両道才色兼備の白眉の娘】

本当なら【しかし変人】とつくべきだが、いかんせん彼女は歴代の【変人】達とは違い、コミュニケーション能力に特化した変人であるので、いつだって【あしからず】となったのである。

そんな彼女は最近、苦々しくも甘い感情を胸に抱いていた。
相手は上司のビス・ケイリスク。といっても、惚れた腫れたの話ではない。
さて、まずはエリカの、傍(はた)から見れば不遇な生い立ちについてお話しようか。
エリカの生まれは、英国に似た魔法使いの国。そこの中心都市のメインストリートの商店街で一番の杖職人の店の一人娘である。
クロックフォードなどという珍妙な苗字は、職人としては一流だが教養は無い祖父に、孫として拾われた母が適当に付けられた名前だ。
優秀な職人の店であったが、小さな店は（外観的に）傾いており、入り口すぐの廊下の両端には本と紙束と、よくわからない薬品の瓶が詰まった埃のかぶった棚が迫る上に、窮屈な廊下を抜けた先のカウンターは、商品の箱が積んであって役割を果たしていないという、『魔法使いの杖ここにあり』との『銀蛇』ブランドの店とは思えないものだった。

魔法使いの杖は子供が生まれて一度も切っていない産毛を切り、それを木の芯に詰め、特殊な加工を施して聖銀で覆い、魔法のコーティングをして、一人に一つのオーダーメイドの杖が出来上がる。
これの製法を『銀蛇』といい、エリカの生家『銀蛇』はこの杖製造技術を作り上げ、どこよりも優れた技術で誉(ほま)れ高い店なのである。
しかし生活も庶民と変わらず、むしろ質は悪い。倹約家で職人気質の曽祖父によるものだったが、エリカはまさか自分の家が、この世界中から注文を受ける程の大手だとはこの8歳まで信じていなか

った。
曾祖父と母との三人暮らし。先代の曾祖父は職人としては退き、母のアイリーンが店の主人だ。
父は生まれた時からおらず、聞くところによるとエリカが生まれる一月前に失踪したのだという。母もまた親無し子。曾祖父とは血が繋がっておらず、拾われて孫として育てられ、今や郷(さと)では【杖専門店銀蛇】の名は知らぬほどの職人である。

さて、子供が生まれる一月前に行方不明になったエリカの父であるが、不思議にも父を悪く言う者はいなかった。父も身寄りがおらず、休みにのみ【銀蛇】に居候という形で部屋を借りていた貧乏学生だったのだが、気が優しくて不器用、根が真面目で・・・と、まぁ、評判だったのだ。
ついでに言えば、エリカの美貌は父譲り。小綺麗な女顔の実直な少年は、商店街の隠居爺婆(いんきょじじばば)を中心に人気と信頼が著しく、奇しくも父の失踪を批判したのは一人孫が大切な曾祖父のみで、エリカは曾祖父の実父への愚痴と、近所からのポジティブな噂話を聴いて育ってきたのである。

エリカの父への認識はこうだ。『“何かの不幸”に巻き込まれた“可能性”のある行方不明の“母の”夫』。
父親の顔なんて、今はどうなのかは知らない。けれどでも、自分の顔を鏡で見れば、良く似た造形をした模造品がそこにある。写真はあるがどれも若く、母は良くもまぁ、こんな女顔のチンチクリンに惚れたものだ、と思う。１０年以上たっても、父のことを愚痴り続ける曽祖父を見ては、ハイハイそうね。喧嘩ばっかりしてるくせに、けっきょく孫がかわいいのね。と、空気を吸うのと同じように相槌(あいづち)を打てる。

しかし問題は、ご近所の商店街の皆様である。
あの人たちは父を褒めることしかしない。すこし出来の悪い孫や子供や兄弟の話をするような感覚で、貶(けな)して馬鹿にしては『あいつは本当に馬鹿で不器用だけど、いいやつだったなぁ』などで終わる。
思い出話はヨソでやってよ、というのがエリカの本音だった。エリカの姿を見かければ引き止めその場に座らせて、あえて父の話をすることもあるまいに。顔と名前しか知らない人間の知識など、歴史の授業じゃないんだからいらないでしょう？

そんなエリカには、いくつかの悩みがあった。
一つは件(くだん)の余計なお世話。さて、残りは幼いある日の、友人との出来事で説明しよう。

魔法使いの国　幼馴染

※※※※

両親共通の友人に、フランク・ライトという男が居る。学生時代の父・シオンの親友で、凡庸な顔立ちのメガネの男である。

魔法使いの国と言えど、魔法使いではない、他国から移民してきた普通の人間もいる。フランクは半分は代々の魔法使い貴族、半分はそういうただの人間の間に生まれた貴族分家の魔法使いだった。

性格は見た目通りの育ちのよさそうなポヤヤンとした中年男性である。温和で真面目で、唯一の趣味は仕事と読書、特技は水の魔法と子守り。三十路手前で、周囲には隠居じじいの様だと言われている。

早くに許嫁と結婚して、同じく卒業と同時に結婚したエリカの両親とは現在も交流が続き、エリカと同い年の息子もいる。

エリカはこのフランクが好きだった。エリカの母とは男女を超えた固い友情で結ばれているので、本当の父親になるわけはなかったが、父無し子のエリカにとっては、いない父より父も同然。

『特技・子守』と言うだけに、底抜けに優しくエリカの話も最初から最後まで聞いて、同じ目線で会話してくれる。普通より少しだけ聡いエリカを、子ども扱いはしない。

動物と子供には好かれる男。それがフランクだった。

そしてその一人息子・ベンが、今回で言う『友人』である。

友人という響きには、いささか大人っぽさが漂う。１０歳にもならないエリカたちには、『ともだち』という単語の方が近いだろう。
同い年の幼馴染（ともだち）は、とにかく気が強かった。エリカはもちろんで、ベンもそうである。お互いに負けず嫌いの頑固者。

ただ、ベンのほうが年相応の男の子らしく甘えん坊ということもあって、姉と弟のような関係だった。
彼も一応は上流階級の生まれである。魔法使いの子供は、１０になるかならないかで杖を与えられ親や寺院、学校で魔法を習うのだが、彼は8歳にして教育として魔法を扱うことが出来た。とみに炎の魔法は、小さな火種くらいなら杖なしで出せる。これは才能を持った大人でも難しいことだ。
彼の杖も、もちろん銀蛇製法の銀蛇ブランド。オーダーメイドゆえその人によって、ぐねぐねと…またはゆるやかに曲がる銀色の透き通る杖は、持ち手がレバーの様に９０度に曲がっていて、らせんを描くバネか、とぐろを巻く蛇の様にぐるぐるの形だった。
彼の手にはずっと大きいそれを、ベンは腕に蛇を巻きつけるようにして得意げに相棒を扱っていた。

まぁ、エリカの前以外で、だけれど。

エリカの悩みその2。エリカは魔女なのに、魔法が使えなかった。
エリカも杖は持っている。けれど、それは直立するようにまっすぐの形をしている。ベンの様に杖が曲がるのは、生まれ持った魔法がいかに強いか、という証だ。
杖とは避雷針の様に魔力を集めて放出する道具である。

えしかしエリカには、避雷針が集める魔力すら無いということになる。
周囲は色々言う。特に年の近い子供なんて明け透けだ。
『魔法が使えない子』、『移民の子』、実際父親の出生は分からないわけだし、反論の仕様が無い。あと、子供がそういうことを言うということは、親も陰ではそういうことを言っているということだ。酒屋の優しいオバさんも自分を憐れんでいるから優しくする…なんて、エリカの様な子供が気をまわすことではないのだけれど、エリカは気付いてしまう。子供は気付かず、ただ与えられた親切を喜ぶのが一番良いのに。

だからエリカは、近所のお節介なアレコレが嫌いなのだ。魔法使いの街で魔法使いの杖を作る店に生まれて、魔法が使えない。これはエリカが大きくなってから、それこそ自分を分析し理論整然と語ることが出来る年頃になってから言ったことだが…それは不便だけど不幸じゃあない。
この商店街のすぐ裏手には、スラムがある。夜になると、明かりに群がる羽虫と一緒に出てくる女達や、名もない子供がいるのを知っている。

曾祖父は嘆く。

「それは大人の、それもよほど意固地でひねくれた奴の考え方だ。お前は両親から扱いが難しいものばかり継いでいる…じい様は、お前のそんなところがお前の才能うんぬんよりも不憫でならないよ…」
そういうじい様も、近所じゃ捻(ひね)くれ爺と噂されているのだけれど。

※
※
※
※

魔法使いの国　始まり始まり

さて、始まりはいつも雨…ではなく、始まりはいつも突然である。
エリカ自身はよく覚えていないが、それはあれで頭のいいベン少年の証言から状況を説明できよう。他にも目撃者はいたが、彼ほど実のある証言は出来なかった。
これから語る出来事が、エリカの三番目の悩みでかつ、彼女の人生を大きく変えた事柄の発端だ。

ベンこと、ベンジャミン・ライト少年、小柄なエリカよりさらにチビで、かつ気の強くて短気なので、近所では有名なガキ大将である。
しかし一応お貴族様で、一応、神童やら天才児やら言われているエリカの幼馴染である。

その日もエリカは、商店街のスラム街の境にある路地で苛められていた。いつもは二人か三人、エリカより少し年上の奴らに『ブサイク』『チビ』『貰われっこ』『アホ』『馬鹿』『間抜け』等のあらぬ暴言を吐かれる（もちろん、彼女を知る貴方方はお分かりだと思う）のだが、今回は様子が少し違う。
今回は『少し年上』どころか、どう見ても一回りは上の青年五人組だった。さらには、明らかに酒臭い。どこぞの道楽不良息子の集まりだろうか、衣服は小奇麗なものだし、まだ二十歳（ハタチ）に届かないくらい若いのに、立派に破落戸（ゴロツキ）の風情である。

ぐるりと囲まれたエリカは、小さくなって警戒の目を向ける。
ニヤニヤとエリカを囲む若い男達。さらに若いエリカ。この文章だけ見ると、まるで学生の校舎裏告白シーンのようだ。こいつらロリコンか？

「おい、こいつ見ろよ。チビのくせになかなかいい顔してるぜ」
「こいつ知ってるぜ。そこの『銀蛇』の一人娘だってよ」
「スラムの娼婦から買われたって噂だぜ」
「銀蛇？俺も銀蛇製の杖だぜ。すげぇな、俺んちより儲けてるんだろ」
「そりゃ当たり前だろ！こいつも杖作れんのかな？銀蛇だけの企業秘密ってヤツ、あるんだろ？老舗だから英才教育でさぁ」
「さぁなあ、でも俺知ってるぜ。そういうオプション付くと、いい小遣いになるんだよ」
「へぇ…美人だしなぁ…」

とんでもないことを言われている。

とんだ道楽息子たちだ。『イタズラされる』レベルのことではない。このセリフを聞けば、親は泣くどころか、卒倒して一家心中を考えるだろう。
しかしこの少年たちが、素面（しらふ）でそんなことを言える人間には、エリカの幼い目にも思えない。しかし、その場の酒のノリで売り飛ばされてはたまらない。
エリカは逃げる算段を考え始めた。スラム近くの路地裏。袋小路なので、後ろは壁、左右も壁、正面も少年たちがいるのである意味で壁。相手は一回りどころか、三まわりは体も年も上で、それが五人…。
（無理だ）

エリカの結論は早かった。（助けを待たなきゃ）
冷や汗が出てきた。ついでに、涙腺も緩んできた。下唇を噛んで耐えた。

ベン少年は、それを袋小路の入り口から見ていた。ちょうど、エリカのいる銀蛇に向かうところだったのだ。
身なりのいいチンピラ達が、袋小路で何かしら囲んで、やんややんや　やっていると思えば、囲まれているのは大事な幼馴染だ。
（助けなきゃ、なんとかしなきゃ）
あたりに通行人はいない。
ベンは魔法に自信があった。杖を取り出し、とぐろを巻いたような形のそれを、いつも通り腕に巻きつける。

一度、ベンはこういう場に立ち会ったことがある。あれもゴロツキ相手だった。
父親と二人で、城下の祭りの帰りだった。すっかり夜は更け、ベンもすでに1時間は夜更かしだ。
そこを破落戸（ゴロツキ）に絡まれた。ベンの父は身なりがいい割に、お世辞にも強面ではないヒョロ長の優男なので、もしかしたらオヤジ狩りだったのかもしれない。
いつもニコニコしている父の顔が強張った。

どこの世でも祭りというのは、大概が無礼講である。子供は合法的に夜更かしできて、大人も…時には成人に近い若者も酒をたらふく口にする。しかし『成人に近い若者』といったら、当然大人には数歩踏み込めていないわけで、周囲の大人の認識は『大人に近い子供』なのである。そんな子供に大人の薬・アルコールを与えるのは、一種の社会勉強でしかない。

けれど大人の薬というのは、頭を鈍らせる効能があるわけで……ライト親子が祭りの夜に遭遇したのも、そういう輩(やから)だった。

「オジサン、俺たちに金を貸してくれないか？」

青年たちは緩んだ口調で、当然の様に金銭を要求する。

フランク・ライトは、後ずさりした息子の背を叩いて自分の脇に押しとどめ、いつも通りの柔和な笑みを唇に浮かべた。

「おやおや、今日はどこも明るいが、ここらへんは電飾も無くて暗いもんだね」

不安げに父を見上げるベンの背中をもう一度叩いて、フランクは若者に話しかける。父の無言の叱咤(しった)をベンは感じ取った。『いつも通り』に、『堂々としていなさい』。

「さて、私は早く西区の家に帰って、奥さんにこの息子を寝かしつけてもらわないといけないんだ」西区は、貴族の屋敷が多くある街である。

「御用なら、明日にでもご自宅にうかがおうか。君たちのご両親とも久しいことだし丁度いい。ああ、私はライトというものだ。言えば、ご両親はご存じだと思われるけれどね」

その文句はまるで魔法だった。みるみる青年たちの顔色が変わる。緩んだ口元はどんどん融解して、表情は迷子の子供の様に頼りなさげになった。

ベンはこの出来事で、はっきりと理解した。自分の家名は武器になる。いざという時の手段になる。それだけの力があるものだ。水戸黄門の印籠だ。ベンは恐らく初めて、この武器を誇らしく思った。

ベロベロに酔った青年集団は、丁度あのエリカに絡んできた彼らに良く似ている。いい服を着て育ちがよさそうなところや、素面(しらふ)より大胆なところ。ただ違うのは、この時の青年らの方がまだ若く、親の手がかかっているのが丸わかり、いたいけな女の子をいじめる彼らの方は、明らかに道を踏み外しているということだった。

「やめろ！」

ベンは今、姫を悪者の手から攫(さら)う騎士(ヒーロー)だった。しかしその騎士の名前は、ドン・キホーテなのである。

※※※※

『水戸黄門の印籠』と称したのは、いささかここの世界観を壊しすぎただろうか。謝罪しよう。
「やめろ！　」
灰色の壁に囲まれた裏袋路地、チンピラに絡まれる美少女を救うため、勇猛果敢にいきり立つベンジャミンの登場に効果音をつけるとすれば、『じゃじゃーん』。
「……は？　」
突然登場したがきんちょにぽかんとする酔っ払いだったが、「やめろ！　」テイクツー。
再度ベンが畳み掛けると、なんとも言い難い雰囲気になった。
現代ネットスラング的にするなれば、『やめろってよｗｗｗｗｗｗｗ』『ヒーローｗｗｗワｗロｗｗスｗｗｗ』たじろいだのはベンの方である。ベンはエリカを見た。ここは『助けて！　』とでもいうところ。
しかしそこはこの物語のお姫様、エリカ嬢だった。
「アンタばっっ――――――かじゃないの　！！？　」その紅の唇から出た罵倒に、思わずチンピラも一瞬黙る。
「なんで大人を呼ばないのよチビ！　役立たず！　」

ベンは得意だった。『かわいい幼馴染を僕が助ける』その華々しいシュチュレーションの空気に酔っていたと言ってもいい。
わかりやすく言おう。ベンは、『萎えた』。気分とか、やる気とか、そういうものが。

そこからはあっというまだった。
ベンはヒョイと片手で抱えられ、あわててジタバタと『ぼくはライト家の人間だ！』と言うも酔っ払いチンピラは当然取り合わない。怖くなってきたベンは年相応に絶望し、泣き出した。
ただエリカがそれを呆れたふうに見て、「コイツに怪我でもさせたら、お兄ちゃんたちウチのママとおじいちゃんと、こいつのおうちの人に殺されるわよ」といつも通りに言ったので、ちょっと落ち着いたのは不思議だ。
エリカもまた、顔色は蒼白だが、自分より取り乱すベンが来たことで少し冷静になっていた。（男の子って駄目ね）それくらい考える余裕は出来た。
しかし打開策が見つからないのは同じこと。今考えるのは、『頼りになる大人』が助けに来ることだ。
小さな頭で考える。誰かしら、このぴーぴー耳障りに泣いている声を聴きつけてやってこないだろうか。
けれども残念なことに、この絶望的な状況で、この小さな頭が考える程度のことは、酔っ払いの鈍った頭でも行き着くのである。
『耳障り』だというところだ。
「うるせぇ！　」

「きゃあ！　」
男が横殴りに少年の肩横っ面を殴り飛ばす。図太いところのあるベンは、さらに大きく泣き出した。「ぅわあぁぁあああぁぁん」
子供の泣き声というものは、人間が本能的に『焦る』作用があるのだという。なぜだか『泣き止ませなきゃ』と思うのだ。
「くそっ、黙れ！　」
「ぎゃっ！　」
「やめて！　」
また殴る。
「やだ！　なんでもするからやめて！　」
ベンの泣き声が小さくなると、エリカの悲鳴が大きくなる。
「ベン！　やだ！　死んじゃう！　ベンが死んじゃう！　」
エリカがオウムの様に繰り返し叫びだすと、エリカを捕まえていたチンピラが手を離した。
怯えた声。「も、もうやめろよ…死ぬって」
冷たい石畳に膝をついたエリカは、自分以外のその声にパニックになった。自分は『死んじゃう』と口走った。この人も『死ぬ』と言った。

それは、それはとても、とても――――――

こわい。

エリカ・クロックフォードは、その日、街から消えた。

魔法使いの国　荒野

※※※※

その時何が起こったのか？

エリカは自室の窓に頬杖を突き、通りを見下ろしながら、８歳児にしては大人っぽい溜息を吐いた。

「はぁ……」

階下から、母が自分を呼ぶ声が聞こえる。

「はぁい」

返事を返しながら、エリカはその『感覚』に「ああまたか」と思った。視界が失せる前に、靴をひっかむ。履物を何かしら無いと、うっかり足を切ることもあるのだ。返事はしたものの、結局自分は母を手伝えない。

次の瞬間にエリカが見たのは、なだらかな丘に、白い廃墟の群れが肩を寄せ合う荒野の景色である。

さて、エリカの三番目にして最大の悩み事。
あの日から始まった、『エリカちゃん消失現象』だ。

※※※※

いつのまにか消えて、いつのまにか帰ってくる。
それだけのことだが、最初の時は散々だった。
消えた少女にチンピラは大狂乱。息も絶え絶えにその場を逃げ出し、二発殴られただけですんだベンの証言で、自宅にいるところを捕まった。
銀蛇とライト家総力をあげてのエリカ捜索が始まったが、エリカが見つかったのは日の出前、明朝の路地、あのチンピラに追い込まれた同じ場所で、同じ格好で見つかった。
これを君は何と　？　『神隠し』。そう、それだ。
エリカはその日から、ほぼ十日に一度。『神隠し』に定期的に遭う体質になる。

※※※※

エリカのそれは、気付けばぽつねんと荒野に立っているだけの現象である。

荒野と言っても様々で、人のいない荒れ果てた土地――――――というだけで、陽に照らされた砂漠、地面がひび割れた肌寒い土地、ひょろひょろ細長い枯れ木だけが生えた赤土の地、時と場合を無視して、昼や夜や黄昏、または暁を見ることもある。

共通するのは、『人がいない』ということだ。

いや……一度だけあったか。誰かに会った、一度こっきりのことが。

※※※※

エリカはまず、靴越しに砂利の感触を感じた。靴底を地面にこすると、小石が足の裏で転がる。

あたりは星も月も無い真っ暗闇。やはり、エリカはいつも通り一人だったしで、気丈な彼女も途端に気弱の沼に落ちた。

いった気持が淋しくなると、泥にズブズブ足を取られるように、後から先に沈んでしまうものである。

自分の指先すら見えない闇で一人きり、さて皆様方は気を強く持てるだろうか？

「うえぇ……」

エリカは泣きべそをかきながらも、自分のするべきことをした。

１０歳にもならない少女としては、この状況で最善の策である。

そっとしゃがみ、むき出しのひざをつかないように地面の小石にさわる。下がただの砂利道であることを確認し、耳を澄ませてあたりを探る。

水音がするならここは川だ。そして、石が丸ければそれは川の石だ。

エリカが触ったのは、角ばってチョークよりいくらか硬い脆そう

な石だった。削り出したか、崩れたか、むき出しの断面ばかりだ。一面だけつるつるすべすべしている。
そしてその小石の下から、細長い雑草のようなものが生えているのも分かった。これにはすぐ手を引っ込める。
毒草ならば、素手では危険だからだ。むやみに『触らない』『近づかない』『関わらない』は、魔法使いの子供の最初の躾(しつけ)で教えられることである。何せ魔法使いの国、一口に『毒草』といってもピンからキリまで。キリまで行くと常軌を逸しているレベル。薬草に擬態する触れただけで人死にが出る劇草で、毎年モチで窒息死くらいの被害が出る。

エリカはいくつか小石を手に取ると、前方に一つ、右に一つ、左に一つ、後ろに一つ――――――と放ってみた。
音を聞いて、『実はこの先断崖絶壁』だとかいうことが無いようだと確信する。

いつものエリカならば、ここで終わって、静かにこの場で帰る時を待つ。帰る時もまた、唐突に、瞬きのうちに移動するのだから。慣れているので、冷静なものである。
しかし今回は勝手が違った。何せ瞼(まぶた)を閉じた時よりも深い闇の中だ。風もなく、耳の奥では、オウオウと唸(うな)るような自分の血の巡りの音しか聞こえない。これでは、ここは死の淵ですかと大人ですら泣き叫ぶ。
人間、陽の下で生きるようにできているのだ。この現象の原因を知っていても、エリカが耐えられるはずもなく、『迷子は動くな』の鉄則を破って、ポケットいっぱいに小石を詰めて摺(す)り足で歩き出した。
歩きすすむたびに、進行方向に小石を投げていく。自分の体がたてる音しかしない夜道に、耳を澄まして場を探る。聞き漏らすまいとするのは、自分へ降りかかる脅威の足音。もちろん自分以外の生

物、人物の気配だって例外ではない。
さながら野生動物だった。慣れてくると、歩幅もだんだん大股になり、エリカはずんずん進んだ。面はすっかり涙も乾き、形だけ開いている瞳は爛々（らんらん）と輝いている。
エリカは図太かった。そして少しだけ賢かった。いや、賢いというよりは、勘が良くて運が強い子だった。

時間の感覚なんて、不覚にも泣きべそをかいたころからなくなっている。小石の音が変わったのは、百は投げたかという時だった。

石が落ちる音がしない。

立ち止まって、もう一度投げた。やはり、しない。
草地に出たか、それとも、そこに地面が無いのか――――――？
背筋が寒くなったエリカは、一気に三つ握って前方にブン投げた。
それはもう、力いっぱいに。

「あいたぁっ！」

次に聞こえてきたのは知らない男の声で、さらにエリカは今までの経験から『ここに人はいない』と思っていて、加えて――――――
エリカという少女の気性がまずかった。
小石と侮（あなど）るとケガをする。いや、この場合は本当にケガをした。

この少女の手に握られていたのは立派な武器だ。

次の瞬間に、エリカはあらんかぎりの力で、闇の中の未知の敵へと攻撃し――――――悲鳴を背にして脱兎のごとく逃げ出した。

それはとても、衝動的で悪意と敵意しかない犯行だった。

魔法使いの国　宵の果て（前書き）

【最果ての物語】

※著者未定

かつてはこの世の栄華（えいが）を極め、数々の文化と技術があった世界。
搾取（さくしゅ）の果てに太陽を枯れさせ、未だ新しい命は芽生えず。
この世界が再び新しい物語を築くのは、さらに数億万年後のことである。

ちっちゃな女の子の投げた石は、どうやら男に見事ヒットし、決してトロくさくはない立派な男性である彼に、衝撃と手傷を負わせた。
詳しく状況を説明するなれば、脆い石ころはぶつかったとたんにパックリ二つに割れ、その断面で男の額もパックリ裂かれたというわけである。
少し切った程度でも、血管の多いのが頭という場所で。それはエリカにとって幸か不幸か、これからの展開を思うと断言できかねるが、しかしまぁ、男にとっては不幸でしかない。
噴き出た体液に男は盛大にひるみ、エリカはその間にスタコラサッサと闇にまぎれて逃げたのだった。

「ひゃぁああ」
しかしあちらも、九歳女児に負けはしなかった。悲鳴を上げながらも、すぐに後を追ってくる。ここでエリカは、悲鳴に少しの違和感を感じたが…それを考える間も余裕もなかった。
逃げる女の子（美少女）、追う男（血みどろ）。
――――――さて、これが明るい昼間の交差点だったら、だれがこの少女の方が加害者と思うだろうか　？
「きゃあ　！　」
「つ……捕まえたっ、ぞ　！　」
そして男は見事、少女を腕に収めたのだった。

「いってぇ…このガキ、とんでもねぇな」
「大丈夫ですか、ミゲルさん」
「…大丈夫なもんかよ、イテテ」
ざり、ざり、ざり……。
もう一つ、近づいてくる足音と男の声。…あの悲鳴の男である。
「おいお前、よく裸眼でこん中見えるな……俺は暗視スコープねぇと無理だわ。さっき石をぶつけられた時に飛んでっちまった」
「俺の特技、これしかないんですよ。どこでも見えるっていうね。このへんは何にもないんで、普通に歩いて大丈夫ですよ。スコープは俺が後で回収しときます」

（二人いたんだ　！　）
エリカは身を固くする。
（『見える』って言った　！　もしかしてぜんぶ見えてる　？　暗くても全部見える　？　そんなのどうやって逃げればいいの　！　）

「あ、君も大丈夫かい？おじさんたちはね、エリカちゃんを助けに来たんだよ」
エリカを捕まえている男がいった。
なぜ自分の名前を知っているのか。彼女の顔が恐怖に歪む。
この光のない中でも『見えている』男は、彼女の表情を見て首をかしげた。普通ここは、安堵するところではないのか。
首をかしげつつ、男は続ける。
「大丈夫だよ、おじさんは暗くても見える『目』があるからね。エリカちゃんのことはちゃんと見えてるよ」
（やっぱり　！　）
さらにエリカの顔が恐怖に歪む。男は首をかしげた。

（……あれ　？　）

エリカにしてみれば、文字通り一寸先も闇、その先も闇、さらにその先だって闇である。自分の存在すら危うい闇だ。

そこに現れた、正式名称・動物界後生動物亜界脊索動物門羊膜亜門哺乳綱真獣亜綱正獣下綱霊長目真猿亜目狭鼻猿下目ヒト上科ヒト科ヒト下科ホモ属サピエンス種サピエンス亜種。しかもオス。分からない視界に鋭くなった感覚は、男の体臭も、走って荒んだ呼吸もよく分かった。

エリカは保護者に口を酸っぱくして言われている。『変な人には気をつけなさい』。

微かな血の匂いと汗の臭気、ゼエゼェハァハァ荒い息交じりの『変な人』が、自分の肩をつかんでこう言っている。

「えりかちゃんのことはちゃんとみえてるよ」？

お先真っ暗、人生も閉ざされたと思っても仕方ない。なにせ九歳である。

エリカは戦慄した。

（――――逃げられないんだ）

そして、次の瞬間――――――産声よりも声高に泣き叫び、男たちの鼓膜に多大なダメージを負わせたのだった。

魔法使いの国　主役の脇で？

「まことに申し訳ない」
母親（アイリーン）の真摯な謝罪に、男は目の上の傷に布をことさら押し付け、むっりと無言を通した。
隣のもう一人の男が肩をすくめ、大きな体をテーブルの前で小さくしている。相棒の態度を恥じているようで、同時に『銀蛇』のこの粗末なリビング兼キッチンに通されて、恐縮しているようだった。
エリカの母、アイリーンは、、スッと通った鼻筋に黒目勝ちの一重瞼、薄い唇、手足の長い体系に華奢ながら筋肉質の長身という、この界隈の娘たちから熱視線を受ける女性である。彼女たちには質素な服や、無造作にまとめられた後ろ髪すら魅力的に映るらしい。
男よりも豪胆との噂、美女というには厳つく、美人というよりは美形と称したい。中性的な女だった。
迫力ある女店主に男は、片方が口をへの字に曲げ、片方がそれを苦笑するという具合。
実際、このいじけた男――――――ミゲル・アモはたいそう小柄な黒人で、それを気にしている彼は、自分より頭二つ分長身のアイリーンや、大柄な白人の相棒――――――ダイモン・ケイリスクに囲まれ、実際のところこの場の誰よりも、居心地の悪い気分を噛みしめていたのだ。

「……お茶を」
アイリーンがそういって席を立つと、ミゲルはわずかに椅子の上で身動（みじろ）ぎした。
前述のとおり、商店街一番の大店（の、はず）『銀蛇』は、そうは見えないボロ店舗である。店と工房に押しやられている居住区のリビング兼キッチンは、いざという時には客間も兼任している。

住人が子供と、明けても暮れても職人が二人しか居ないので、基本的にこの建造物は、店のカウンター周り以外は物があふれていて、客を招き入れる態をしていないのだ。

どんな高級レストランでも、ヤカンを紙の山から発掘され、水を入れる、というプロセスまでは見せないに違いない。

そういうところをアイリーン自身がまったく気にしていない風なのも、アットホームすぎて居心地が悪い。

ふと、コンロの前で、テーブルから背を向けたアイリーンが呟いた。

「ウチの娘はいささかお転婆でしてね。しかしながら、自分ではどうしようもないことはやらんのですよ」

男たちが『保護』してきた少女は、どう見ても親が見ても、異様で異常な動揺のありさまだった。ミゲルとダイモンは、そろって視線を下げたが、アイリーンの声色には非難は含まれていなかった。しかしこれは、保護者側の主張である。

ヤカンを火にかけると、アイリーンは静かに席に戻り、マットがぐらつく椅子に慣れたように落ち着くと、男たちを見据えて言った。

「エリカの目に、貴方たちが善人に映ったのならあの子は石なんて絶対に投げません。物は考えられる子だというのは、わが子ながら自負しておりますので」

「彼女を驚かせてしまったようで」

ミゲルがあわてて言った。

「それはいかように　？　」

思い出したのか、ミゲルの眉間にしわがよる。もともと面相がいいほうではないので、彼の雰囲気は剣呑としたものになった。ダイモンが沈黙に言葉を被せてくる。

「…あ、いえ、こちらは安心させるつもりが、裏目に出た……といった感じで。必要以上に驚かせてしまいました。実をいうと、僕も男の子二人の子持ちなんですが、やはり難しいですね。女の子はまるっきり違うようで……」
フォローのつもりだったのだろうが、語調がどんどんと真剣みを帯びてくる。
「本当に…申し訳ありません」
ついには頭を下げたダイモンに、ミゲルは『とんでもない』という顔で、ダイモンを睨み付けた。「この馬鹿野郎！なんで謝るんだ」
「でも…」「こっちの非を認めることになるだろうが　！　最近はそういう…漬け込む隙ってのを与えちまうと面倒なんだ……　！　」
以上、小声での主張である。

「……ゥオヘン」
ミゲルが場をとりなすように咳払いした。
「尊父もお呼びいただけますか。娘さんのことで」
「我が家に父親はおりませんの。祖父でよろしければ」
「そ、そうですか…いえ、どうぞ、ご老公でもなんでも」
「エリカ…本人は同席したほうが？」
「いえ…むしろ……」
「わかりました」
ミゲルは、ここまでで一度もアイリーンの表情が動いていないことに気付いたが、彼女の紅茶色の瞳の奥で、明かりの加減か、くるりと赤い何かがひるがえったのを見た。

魔法使いの国　主役の脇で？（前書き）

『魔法使いの国』
※著者不明
かつて魔女が降り立ち、この世界のどの地よりも繁栄したとされる国。『魔法』という技術が日常にも浸透している。
故に、正式名称が『魔法使いの国』である。
魔女の直系である魔法使いフェルヴィンが建国者とされる、勤勉と職人の国・フェルヴィン皇国からは、聖地との認識をされている。
数年前フェルヴィンの双子皇子の片割れ、弟のハンス王子が婿入りし、正式にフェルヴィン皇国とは、姉妹国との同盟を交わす。
移民も多く迎えられているが、繁栄の陰には魔法が使えない移民と魔法使いである現地民との、深刻な差別問題がある。

魔法使いの国　主役の脇で？

先代『銀蛇』老は、流木の様な老人であった。
腰はやや曲がっているが、動きはちゃきちゃきとしていて、現役具合を主張している。
枝垂(しだ)れた眉毛の陰から覗く、澄んだ空色の鋭い目つきにアイリーンとの共通点があった。

「さて、まずは私どもの役職についてご説明しましょう」
慣れていないと丸わかりの、厳(おごそ)かな口調でミゲルが場を仕切るが、老は座席のぐらついた椅子の上で、ゆっくり頷いて見せた。

「我々は、『異世界管理局』を母体とした、『物語管理局』という組織の実働部隊、正式名称を実働異世界派遣部隊『夢人(ゆめびと)』の第三部隊に所属しております」
「いせか……なんだって？」老がふさふさとした眉を持ち上げる。
「異世界、派遣、実動員、です。名前の通り、『異世界』間の外交を『管理』する組織の、実際に異世界に出動することができるのが、我々というわけです。異世界間での密輸犯罪などを主に取り締まっている、役人……の様なものと、お考えください。
『異世界』の定義は、この世界ではメジャーだと聞いておりますが？」
「確かに。ここは魔法使いの国ですから、異なる世界というものは存じております。しかし、それはあくまで『知識として』。言うなれば伝説上のファンタジーです」
「……我々からしてみれば、この世界の方がよほどファンタジーファンタジーなのですがね」
ドラゴンが重要絶滅危惧種の現地人がそう言ったことに、ミゲルは驚きを隠せない。

「つまりはまぁ、そういうことなんですよ。文化が違う、言語が違う、人の営み、さらには人間が何から進化したのかというプロセス、『ニンゲン』という生き物の定義すら違うこともあり得る。そう…ファンタジー、想像上、空想が現実、それがまかり通る。まさに物語の世界です」
「物語の世界……」
「そう、ここも含めて」
銀蛇の祖父と孫娘は顔を見合わせた。
「だから我々の組織は、物語管理局というのです」

さて、ミゲルはここで、もう一つの事実をあえて言わなかったのだが、それは後々に語ることとしよう。

ここまでくると、曽祖父と母親は娘に関して何かしらの『予感』を感じ取る。
「我々は、今回エリカさんを『保護』いたしました。貴方方は、エリカさんの失踪にお気づきでしたか　？　」
「気づくも何も……」
老は明らかに困惑している。アイリーンが後を引き継いで言った。
「エリカの『あれ』は、だいたい半年前から。それこそ、半月に一度……いいえ、最近ではあの子も私たちもすっかり慣れてしまって、私が確認していないものも入れると五日に一度はいなくなるのです」
「い、五日に一度……　！？　」
「そ、そりゃまた、驚異的な数字ですね」
男たちは、目玉をむき出しにする。

「なんでそんなことになるまでほっといたんだ！　ばっかじゃねえの」
椅子を蹴飛ばして吠えたミゲルの赤黒い顔を見返し、老は長々と溜息を吐いて首を振った。
「やれやれ……ここでは良くあることなんですよ、お役人。子供には特に、よくあるんだ……。歩いてすぐの子供が転ぶのとまるで同じ。魔力の暴発――――――といっても、普通なら窓が割れる、大風が吹く、火が知れずに燃え上がる、それくらいなんだがね、あの子はこの年まで魔法が使えなかった。『この世界ではよくあること』なんだ。人でなし、親で無しと罵らんでくださいな。いやぁ、麻疹（はしか）のようなものだとばかり……」
背中を丸めた老が、悲しげにぼやく。
「それに…あの子の父親もそうだった」
また長々と深い息を吐くと、老人は皮肉げに言った。
「……ここに来てから、あの子が産まれたあの日に消えるまで。突然いなくなっては帰ってくる。それをあいつは繰り返した。そんな男を家に迎え入れたのが悪かったのか、いやはや……良く似ているからなぁ、エリカは。ハハハ…」
うつむき、テーブルの木目を見つめながら、老人は空笑いをする。しかし顔を上げた時の老の瞳は、やはり綺麗に澄んでいたため、ミゲルはわずかに椅子の上でのけ反った。

老は問う。

Q. 「…おう、若いの。この物わかりの悪い老人に、良くわかるように答えておくれ。あの子は今までどこにいた？どこに行っていた？」

（あの子の父親もそうだった）

A. 「…異世界、ってやつさ」

魔法使いの国　主役の脇で？（後書き）

ついったー↓　ｈｔｔｐ：／／ｔｗｉｔｔｅｒ．ｃｏｍ／#！／ｒｉｋｕｉｔｉ

「この世界にゃ、因果な境遇の人間ってのがいるもんだ。それはわかるだろう？　見たところ、アンタも長いこと生きてんだからさ」
肩をすくめてミゲルは言った。
「それがどうやら、アンタんとこの娘さんは奇遇にも俺達とおんなじ境遇の様だ。…なぁ爺さん、そこのお母さんも。俺たちは、娘さんを今後も『保護』したいんだ」
「…保護？　」
「ぶっちゃけちまうと、娘さんの身柄を俺らに預けてほしいのさ」
アイリーンの眉が、きゅっと寄った。
「それは……期限はいつまで？」
アイリーンの声色は、厳しい表情と反して、弱弱しいものだった。
固唾をのんで、アイリーンは続きを待つ。
「そりゃあ一生さ。…酷な選択かもしれねぇが、俺に言わせると、『イエス』か『ハイ』しか選べない問題さ。おっと、これは脅しやら不正取引やら詐欺やらじゃないぜ？疑うのは結構だが、俺は事実しか言わねえよ。ウソやペテンや言葉遊びは嫌いだぜ、特にこういう状況ではな。
物語管理局は、娘さんみたいなのを保護して、もちろん生活の援助もする。これから先、娘さんの『病気』は治る見込みは無い。それどころか、もっと酷くなるかもな。そのうち帰れなくなるかもしれねぇ。『異世界』で酷い目にあって、死体すら帰ってこないかもしれねぇ。それを誰より俺達は知ってるが、証明する術は無い。
アンタたちはいくらでも俺達を疑えばいい。いくらでも娘さんの

ことを考えればいい。でも、手遅れになったらその時は俺たちは何もできないんだってことを忘れんなよ」
「……わかった。考えるようにしよう」
そう一言、ミゲルを見据えるアイリーンは蒼白だったが、表情は険しく視線は蛇の様に鋭かった。
ミゲルはじっと視線に耐えていたが、逃げようものなら地獄の果てまで追ってきそうである。…いや、どこから『逃げる』などという発想が浮かんだのかすら――――――。
ようするに怖いのだ。恐ろしいのだ。淡々とした女だと思ったのだが、これが彼女の本性か。杖職人とは杖を作るたびに死線を越えるような、そんなに殺伐とした職業なのだろうかと頭が明後日の方向に問いかけるくらい。
先ほどまで朗々と演説していたはずのミゲルは、気まずげに視線を下げた。詰問…いや、尋問されている気分である。
良く考えろ。ミゲルは打開策を提案しただけだ。けれど『疑え』と促したのもミゲルだ。……自業自得だろうか？
老人は目を細めて孫娘を、委縮したミゲルらを一瞥すると、励ますように彼女の肩を叩いた。
「それで、ひ孫を保護して、どうするんだい　？　」
「そ、そりゃ、悪いようにはしない」
ミゲルは深く息を吐いた。
「教育もさせる、ある程度まで育ったら、仕事も斡旋することだってできる。一人で生活できるようになるまできちんと援助する」
「無償ってわけにゃあいかないだろう？それともそこは、ボランティア団体なのか？」
「…それはノーだ。彼女の行く道は大きく二つ。一つ、こっちが選んだ里親の元で暮らすか。二つ、訓練を受けて、『俺達みたいな』異世界への派遣員になるか。管理局は万年人手不足だからな。収入は十分、食いっぱぐれはしないだろうが、キャリアも積めば使う時間はなかなか少なくなるってとこか」

ミゲルは言っているうちに調子が出てきたようだ。あえて活気をたっぷりの口調を繕い、アイリーンに笑いかけた。…引きつっていたが。

「それなりに面倒も多いが、楽しい職場だ。それは俺とコイツが保証するぜ。男ばっかりってわけでもない。女もいるし、こいつなんか」

ミゲルは親指で相棒を指した。

「――――職場結婚だ。ガキも二人」

「……」

アイリーンはミゲルとダイモンを交互に見詰め、最後に祖父を見た。老は力強く頷く。

「……エリカにきいてくれ。あの子は、もうちゃんとわかる子だから」

魔法使いの国　主役の脇で？（後書き）

ミゲルのオッサンターン終了のお知らせ。
…ミゲルさんは作者のお気に入りです。

エリカはなんとなくわかっていた。今大人たちは、『自分のこと』を話しているのだろうなと。
彼女に宛がわれた子供部屋…屋根裏部屋のベットの上、膝を伸ばしてオレンジの照明が照らさない隅っこの闇を見つめる。
エリカはまだ、『何もしない』ということを楽しめるほど、疲れてもいなかったけれど…なんとなく今は何も考えず、待っていることが一番いいような気がしていた。
エリカはたぶん、頭の隅で分かっていた。いや、理解はしていなかったので、肌で感じていたというのが正しい。だってエリカはまだ、『親元を離れる』なんてことは、とんでもないことだという年なのだ。
だから、（なんとなく予感はしているけれど）…悪いことは考えないようにする。
この心理状態を何と云うか　？　貴方も言葉はよく知っているはずである。夏休み終盤などによくある光景だ。
エリカ・クロックフォード９歳、これが生まれて初めての現実逃避。

……ぎしっ　ぎしっ
ふと、耳に届いたのは、屋根裏までの階段を上がってくる音だった。子供部屋と大人の部屋が離れてある場合、子供はたいがい保護者の『足音』を記憶しているものだ。（母なら大股で一段飛ばしに大きく、じい様なら踏みしめるように、ちなみにベンなら小さな歩

幅でせかせかと）
この大人の足音は誰か？という自問自答には、軽く答えが出た。
あの大人達のどちらかだ。
エリカは一気に不機嫌になった。恐らく足音の主がミゲル・アモならば、さらに不機嫌になったはずである。
「やあ」
寝癖の様に跳ねた茶色の髪、凡庸な顔立ちにドンと乗った真っ赤なフレームの派手すぎるメガネ、人の好さげな笑顔。
屋根裏の入り口から頭だけを出して、大きな眼鏡の奥で苦笑いした男は、どことなく大好きなフランクおじさんに似ていた気がした。

「さらし首」
「…え？」
「おじさんは知らない？生首のことよ。処刑されて、大衆の見世物にされてる大罪人の生首のこと」
ふんっとエリカは鼻を鳴らした。「あと、そんな罪人のおばけの名前なの」
「物知りなんだねぇ」
本気でダイモンがそう目を丸くするものだから、エリカはまた鼻を鳴らす。
分かっているのだろうかこの男。階下から顔だけ出している様子がその『さらし首みたい』と、エリカは言ったつもりだったのだけれど。
「上がってもいいかい？」
ダイモンが訊いてきたので、エリカは小さく頷いた。
「ベットじゃなくて、床でもいいのなら」
エリカが思うに、たぶんこの男は『いい人』だった。メガネは派手だが、その中身はいたって地味だ。濃いブドウ色の瞳が、より無

邪気さを演出している。ただ小さい子供の様で、何を考えているのかは分かりづらいけれど。
　エリカはベットに、ダイモンは床に座って、まず好きなものを言い合った。クッキーやら飴玉の味とか、好きな本や遊び、あと、『お母さん』のことだとか。
　ダイモンはずいぶんと背が高い。エリカがベットに腰かけると、ちょうどダイモンが少しばかりエリカを見上げる形になった。
「俺はね、奥さんと子供…男の子二人いるんだ」
「男の子だけ？」
「そう。けれど、女の子もいいねぇ。女の子もほしかったかもしれないなぁ」
「妹、作ってあげたらいいじゃない。お父さんと、お母さん。二人ともいるんだから」
「うーん、ほしいけれどねぇ、うちのお母さんは、もう子供作れない体なんだ。だから、一人くらいは女の子でも良かったなぁ」
　あくまで男は機嫌のいい子供の様で……エリカはそっと、嘆息した。わたし、まだ子供だもの。そんな難しいのはわかんないわ。
「エリカちゃん、今度は俺たちの仕事について教えようかな。ご質問は？」
「何をしている商売なの？」
「…うーん、まず、商売じゃないかな。この仕事は」
　ダイモンは即答した。しかしエリカは商店街の娘である。
「どちらかといえば、『商売している人を捕まえる』っていうか…」
「わかった、悪いものを売ってる人を捕まえるのね。安いものを高く売ったり、盗んだものとか、売っちゃいけないものを売ってたり…えーと」
　小さな指を折り数えて、エリカは即答した。「まだあったはず」とまだうんうん唸っているが、正解だった。
「あたりー…」
「待って、まだ正解にしないで。えっと、密輸品、人身売買、麻薬

売買、盗品…えーと、わいろ…不当な値上げのこと…じい様はなんて言ってたっけ…」

これすべて、９歳児の頭の中からこぼれ出た言葉だ。

エリカは生まれも育ちも教育方針も、商店街の娘である。

※※※※

ダイモンは、数度にわたって通ってきた。
ベンはあれから商店街に顔を出さなくなっていたので、暇を持て余していたエリカはそのたびに子供部屋で彼の話を聞いた。

「わかったわ。つまりおじさん、お役人なのね」
「そうだね。あとプラス、探偵って感じかな」
ダイモンは下手すぎるウインクをした。エリカは分かりやすく渋顔になったので、ダイモンは肩を落とした。子供ってものは、いやはや、格好悪い人間に厳しい。
「この仕事はね、スカウト制度なんだ。もとは普通の人で、スカウトされてこの仕事に就く。さっきのもう一人のおじさんも、もともとはジャーナリスト……ただのカメラマンなんだ」
「あの怖い顔で小さい人ね」
「そうそう、ミゲルさんって人。戦争とかの写真を撮っていたりしてたいんだって」
「……だからあんな怖い顔なんだわ。あなたは何をしていた人？」
「俺？　俺は学生だったよ。普通のね。学校の先生になるための学校に行ってた。あのままならきっと、君ぐらいの子供に教えてたと思うんだけどなあ。まぁ、そのおかげで奥さんに会えたし……」
ダイモンは目を細めて、幸せそうに笑った。
エリカは質問したことを後悔した。ついでに思い出した。彼のその話、態度に、エリカのテンションは下がっていく。
「…良く考えてみれば、この話は息子にもしたことなかったな。まさか君みたいな女の子とこういうお喋りをするなんて……なかなかいいもんだね、帰ったら子供たちにもしてやろうかな」
エリカは動揺する。彼は少女が沈んでいくことに気付かない。エ

リカは見慣れているはずの室内を、戸惑う様にせわしなく視線を彷徨わせ、
「そうしたほうがいいわ。だって、自分の父親の話だもの、聴いて損は無いのよきっと…」
――――――何もない壁の方に、視線を落ち着かせた。これで彼に顔は陰になって見えない。
「他の人から聞く親の話なんて、嫌なものよ。自分から話してくれたほうがずっといいわ」
「そんなもんかぁ」
「……きっとそうよ。当たり前でしょ？　」
ダイモンの顔をうかがう様に一瞥（いちべつ）し、エリカは今度こそうつむいて右手の甲でごしごしと顔を擦った。
「同じ子供なんだから、私は専門家よ。なんでも聞いてちょうだい」
「いいや、もうこの話は終わりにしようか。話さなきゃいけないことがあったのを忘れてたんだ」
「あら、そう……」
エリカはあらかさまに肩を落とす。それは『がっかりした』とも見えたし、『話が終わって安堵した』とも見えた。
彼女自身も、自分がなぜそうしたのか分からなかった。恐らくは、半々の気持ちだったのだ。彼と家族の話をしたかったけれど、自分が傷つく可能性も恐れた。現に今、彼女は少なからず傷ついている。

※※※※

杖職人の商売では、悪人にも善人にも杖を売る。いや正確には、親が子供に買い与えるものだから、その子供が『悪』にだろうが『善』になろうが、どんな可能性の芽があっても杖を売らなければな

らない。
過去に『銀蛇』の杖を持った人間には殺人者もいたが、慈善活動で勲章をもらった偉人も『銀蛇』の杖を使っていた。金持ちもいるし、没落した貧乏人もいる。この国の王様だって『銀蛇』の杖を使っている。中級家庭以上の家庭なら、魔法用杖のランクが最上の『銀蛇』を買うのである。
これはすごいことだ。
老は言う。「売る相手を選んではならない。売りたくない相手にも、お金を出されれば売らなければならない。これは商人のルールだ。でもね、エリカ。『売りたい相手』というのが出てくる。そういう時は、タダでもいい、絶対に買わせなさい。損はしない」
「エリカ、幸せになってほしい人というのを、お前は必ず見つけるよ。善人だろうが、まれに悪人かもしれない。恋人かもしれない、新聞の質問コーナーの人かもしれないし、家族の誰かかもしれない。『幸せにならなきゃいけない』と思う人だ」

※※※※

ダイモンは、幸せを体現したような男だった。
ダイモン・ケイリスクの話、それだけじゃなく声の調子や、大人げなくすこし間延びした語尾の癖などは――――――エリカにとって、おとぎ話よりは現実的で、けれどまるっきり現実的とは言えない、『手に入らないもの』だった。
だからエリカは思った。

「ねぇ、貴方の子供たちは幸せよ、絶対そうだわ。決まってる」
「え？あ、ああ。ありがとう」

エリカは、彼の様な父親なら欲しかった。だからきっと、彼の子供は幸せだ。

『幸せにならなきゃいけない』。じゃなきゃ、エリカは泣いてしまう。

番外作：違法異世界旅行者『東　シオン』（前書き）

アイリーン「そういえばちっさいオッサンおりませんけど、どうなりましたん？」
ダイモン「ミゲルさん出世しなはったんですわぁ」

※ってことで、ミゲルさんのターン！

番外作：違法異世界旅行者『東　シオン』

ミゲルには、トラウマと言える記憶が三つある。

一つは遠い昔に徴兵された土地で見た光景で、それは後々ジャーナリストとなるミゲルの理由の一つになった。

二つ目は２０の初冬、迷い込んだ異世界で初めて未知の怪物を見た時。

三つ目は物語管理局にスカウトされた後の２８の時。追い求めた戦乱の中で見た、小さな鬼神の猛攻。

舞い上がる砂が視界を黄色く霞をかけていた。ミゲルは腹ばいになって茂みの中に息をひそめ、フレーム越しの先にある光景をフィルムに収めていく。

物語管理局の研修は、平均して3年ほどで終わる。その間に戦闘訓練・基本知識・実習などを経て、『夢人』という実行職員の地位に立つのだ。平均の3年を少し過ぎ、４年で研修を終えた二年目。ミゲル自身、二十も後半で、本業だった記者としても夢人としてもまだまだ新人の心持である。

ミゲルがこの異境で、異端民族と原住民の陣取り合戦にカメラを向けているのには理由があった。

一～五まである夢人部隊の中で、のミゲルが所属する第二部隊。諜報を得意とするそこで、新人が最初にするのは、違法異世界旅行者（しゃ）、通称『異端者（イレギュラー）』相手の情報ファイルづくりだ。

膨大な資料に特攻するのは、ミゲルの性に合わない。現地に飛んで生写真を手に入れなければ、記者（ミゲル）はミゲルではないのだ――――

―。

今思えば、頭の悪い若者のプライドによるものである。ようするに、ほかの新人と混じってセコセコ資料作りをするのが我慢ならなかった。それだけだ。

薄茶色の髪をした異端民族とミルク色の髪をした原住民の、血で血を洗う争い。

衣食住のうちの住を求めて衣も食も削っているというのに、この土地はミゲルの目にはそれほど争うほどに魅力的な土地とは思えなかった。もともと豊かとは言い難い民族同士のことだ。戦は儲かると言うが、それにしたって程がある。所詮は身内の諍いかと部外者（ミゲル）は勝手に呆れ果てた。

（…ん？）

ミゲルは鼻頭にしわを寄せ、カメラを置いて双眼鏡を構えた。異端民族の薄茶色でも、原住民のミルク色でもない。原住民の方の鎧を着た黒い頭が見えた。

「みつけたっ！」

ミゲルは茂みの奥で小さく跳ねた。

異端者（イレギュラー）の中でも相当に若い異端児。１０と少しの年齢にして、３０を超える世界を渡り歩いた旅人。

ミゲルの目的は、彼の写真を撮ることだった。異端者達というのは見つけるのが難しい上に、いざ見つけても特徴というものは目撃者の口伝や、報告書に書かれる僅かな単語の羅列でしか知るすべはない。『青のシャツ・青い目・金髪』なんて資料で、どうやって特定しろというのだ。現状を知った時のミゲルの頭に浮かんだのは、『写真を撮る』という発想だった。

（シロウトが使い慣れないカメラをとっさに構えるなんてことはできない。でも、俺なら……戦場でカメラを抱いて眠っていた俺なら、きっとそれが出来る！）

※※※※

少年は身を低くして地を滑空するように駆(はし)る。額に巻いた布が光線の様にひるがえり、身を捻れば空に曲線を描く。

軽い身なりで驚くほど大きな敵を弾き飛ばし、戦闘分野には秀でていないミゲルの目には、あまりに容易く軽快な動作に『簡単そうだ』と、錯覚を覚えるほどだった。

（得物は長太刀、体格は小柄で華奢だが……体力や力は人並み以上にあるんだろうな。あの武器は彼の体格じゃ、本の強化無しに振り回すのは辛いはずだ。しかし生身でアレとは……）

「……イリ、視力の強化頼む」

「わかった」

ほぼ強引に引っ張ってきたはずのパートナーも、ぐんぐん上昇するミゲルの情熱に素直に協力した。視界が透明感を増し、ぐっと遠くまで見渡せるようになる。カメラを構えた。

その時だった。

（まずい！こっちを見た！）

少年兵の目が、茂みの奥のミゲルを捕らえる。

（いや、見えてるのか！？まさか！）

でも目が合ったのだ。杞憂かと思った一瞬も、彼がまっすぐこちらへ向かってくることで壊される。（まさか、まさか、まさか！）

邪魔な敵は薙ぎ払う。視線はこちらを外さない。足の歩みは異様に早く、彼はミゲルまで一直線だった。

黒髪に黒目だと思っていた瞳の色が濃い紺色だという事にミゲルが気付いたとき、彼はなりふり構わず通信機器に叫んだ。
「帰還！帰還します！ミゲル・アモ即刻帰還――――――」
ミゲルが最後に見たのは、太刀の先にある鬼神の瞳――――――。

※※※※

『――――――ちょう、たいちょう、起きてください隊長」
「うぅん…」
唸り声を上げて第三部隊隊長――――――ミゲル・アモはテーブルから顔を上げた。
部隊の研究室だ……。どうやら、ここ数日の徹夜でついに意識が落ちたらしい。冷たく固い研究室のテーブルを枕に睡眠はとるものではないことを実感した。
（ひどい夢を見た…）
坊主頭を掻き、瞼（まぶた）を揉む。「お疲れですね」と、側らの部下が言った。

「何か悪夢でも見ましたか？」
「ああ…まぁな」
「なんだ、じゃあ器具つけて寝てもらえばよかったですね」
「…脳電図は取らせねえぞ」
「そこをなんとか、次はお願いしますよ。夢とかの――――――そういう研究してるやつがいるんです」
「他を当たれ」
「そんなぁ」
この会話からわかる通り、物語管理局　第三部隊は、アイテム研究を主にしている機関である。元第三部隊員のミゲル・アモは、そ

こに隊長として就任したばかりだった。
　といっても、彼自身には研究員としての技術も、知識も、情熱もない。研究に没頭し、時に暴走する第三部隊の職員達のお守りをさせようという心づもりなのだろう。
「むしろ知識が無くて助かりますよ。あれこれ面倒くさくやり方に口出しされる心配は無いですからね」
　脇に立つこの副隊長とやらも、他の隊員を代表して異論はないらしい。

（嫌なことを思い出しちまった）
　一隊員としての『最後の仕事』は、ある意味ではミゲルにとっては因縁ともいえるものだったのかもしれない。

　まさかあの、東シオンの娘のスカウトなんて。

　ミゲルが知っているのは、まだ思春期も半分ほどしか経験していない幼い少年の姿だ。幼く、華奢で少女めいていて、小奇麗な印象の少年。けれど手を出せば、凶悪な牙で喰いつかれる。
　エリカは周囲が異口同音に口にするように、シオンの面影を色濃く受け継いでいた。むしろミゲルの中のシオンは、あの小さな鬼神のままである。妻子持ちの青年シオンなんて想像できない。
　エリカはそれをずっと小さくした印象で、彼女の一挙一動は心臓に悪いにも程があった。
　隊長就任の際に、この『最後の仕事』はダイモン・ケイリスクに押し付けてきた形になるが、それでよかったと思っている。９歳の女の子に四十手前の男がビビるのも情けないけれど、こればかりは仕方ない。ストレスというものは彼女と顔を合わせるだけで、どう

しようもなく蓄積されるのだ。

ああ、よかった。

本当に心から情けない話だが、解放されたミゲルは、また心から

そう思う。

番外作：違法異世界旅行者『東　シオン』（後書き）

ミゲルさんは作者のお気に入りです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2685s/

IRREGULAR

2011年11月24日19時49分発行